



ボリビアの障害者とともに生きる野原昭子さん

## 神さまはいつも 必要な分だけ



子どもを抱く野原さん

●のはら・しょうこ  
1956年福岡県生まれ。16歳で宮崎カリタス会に入会、98年より修道会を退会して障害者支援に本格的に取り組む。

日本の約三倍の面積、人口約九百六十万人、国民の九五パーセント以上がカトリックの信仰をもつ南米のボリビア共和国。失業問題や貧富の格差は深刻で、多くの人が貧しい暮らしの中にいる。そのボリビアでシスターとして活動していた野原昭子さんは、あるとき一つの決断をする。修道会を出て、障害をもった人たちに徹底的に向き合おう。野原さんはその二年後、コチャバンバ市の郊外で障害者自立支援施設「サン・マルティンの家」を開く。ここでは0歳から大人まで、いつも二十人前後の障害者が社会復帰のためにリハビリに励みながら暮らしている。

「ボリビアの人々は経済的に貧しく、自分たちが生きていくだけで精一杯、お金があつたら治せる障害も一生抱え込むしかないし、何より治るといふ知識がないから障害をもって生まれた子は仕方がないとあきらめられてしまします。」

この家は自立のための短期入所施設。元気になって社会で生きるための力をつけてほしい。もし出ることができなくても、その人なりの能力を見つけ、生きる意味を見いだしてあげたい。それが私の願いです」

野原昭子さんの熱い思いを伺った。



### 心の奥深いところで

親戚の多くが修道者という環境の中で育った野原昭子さん。男の子をいっぱい産んで野球のチームをつくるから修道会には入らない、と言っていた彼女に入会を決定させたのは、「私たちの仕事は貧しい人や病気の人の世話をすること」という従弟のシスターの一言だった。そのとき野原さん十六歳、三日後には志願院にいた。



貧しい人々の中で働くことを望み、ペルーで六年間、一時日本に戻ったが再びボリビアに派遣された。ペルーに派遣されたころから野原さんの中に葛藤があった。障害をもっている人を見ると修道院の規律も忘れ、かかわらずにはいられなくなるのだ。

「祈りの時間であろうと食事の時間であろうと、苦しんでいる人を置いたまま修道院には帰れないでも、いつも時間を守らずにいると、不従順になってしまいます。

あるとき、なぜ自分がこんなにも障害をもった人のケアに没頭するのかを内観していると、突然私の中から『文江ちゃん、好かん。泣いてばかりで、何もできん役立たず』という言葉が出てきました。同時にもう一人の私が『文江ちゃん、ごめんね』と泣き出したのです。気がついたら私自身、涙が止まらず泣き続けていました」

「文江ちゃん」とは、野原さんが五歳のとき亡くなった三歳下の妹のこと。重度の障害をもつてい

た妹に「あんた好かん、役立たず」と言った自分を思い出し、心の奥深く、その言葉が罪の意識のように留まっていたことに気づいた。

「そのとき、障害をもった人と徹底的にかかわれなければ一生苦しむだろうと思い、退会を決意しました。退会といっても修道会も理解してくださり、そのときから今に至るまで、物心両面で協力をいただいています」

### 「神さま、わかりました」

修道会を出た野原さんは、全盲者の施設で働きながら障害をもった人たちの家を訪ねて生活のサポートをしていた。ところが住む場所もない大変な状況の障害者たちと出会い、なんとかしなければと考えるようになる。

「自分の家もないのに何ができるのかと途方にふれていたら、あるイタリア人宣教師が無料で家を提供してくれました。ところが全面的に修理しなければ住めそうもない。とりあえず井戸掘り資金を集めようと訪ねた一軒目が日本人の方で、彼が井戸だけでなく家中の修理を無償でやってくれました。



家はできたけれどお金がない。一年間働いて百万円貯まったら始めようと、日本に出稼ぎにやってきました。叔父の知人に仕事を頼みに何うと、一言の説明も聞かずにその方が手渡してくださったのは、百万円の小切手。組織に縛られることが苦手で修道院を出た私ですから、施設などつくれないと思っていました。でもそのとき、



神さま、わかりました。もう逃げません、と覚悟を決めました」

## メッセージ

実は野原さんが修道院を出てすぐのころ、障害者の友人からメッセージを伝えたい、と呼び出されたことがある。半身不随のその人は「イエスさまがあなたを障害者のために使うと計画されている。神さまがあなたを助けるからと言っていいよ」と野原さんに告げた。そのとき、野原さんにはこのメッセージは慰めの言葉に聞こえていた。

「修道会を退会したことに對して、神さまは怒っていないだろうかという不安もありましたから、その言葉は、間違っていないよという友人の慰めのように聞こえたのです。でも今、そのメッセージが実現している、そして私を支えているのです」

一九九八年に開設にこぎつけた「サン・マルティンの家」はその後も何度か存続の危

機を迎えている。あるとき、閉鎖を覚悟し落ち込んでいたら、追い討ちをかけるように鳥の糞が頭に落ちてきて、通りすがりの婦人から「良かったね、あなた今日はいいことあるわよ」と言われた。鳥の糞ではなく三千ドル（そのときの不足金が三千ドル）でも降ってくればいいけれど、と愚痴を言っていると、アメリカからまさに三千ドルの寄付がきて、その危機を乗り越えたこともある。

また、お金がなくて職員のお給料が払えず、もうだめかと泣きたいような気持ちでいたら、日本の友人から「昭子さんがお金がないと泣いて祈っている姿が見えた」と七千ドル送金されたこともあった。そのとき必要だったのもちょうど七千ドル。そういうことに遭遇するたびに、野原さんはあのメッセージを思い出す。

「絶体絶命の危機を迎えるたびにメッセージどおりの助けがやってくる。三千ドル足りなくて困っているとおびたり三千ドル。みんなが、神さまは昭子の言うことを聞いてくれるようだから、五千ドルお願いすればいいのと言うん

ですけれど、もし五千ドルほしいと言ったら、きつと助けはこないでしょう。

神さまは本当に必要なことを知っておられます。だから神さまの助けは必要な分だけ。儲けようと思おうと絶対に助けてくれません。

もしかしたらお願いしなくてもわかっているのかもしれない、私がお願いするのを待っているのかもしれない。『やっぱり私は頼りになるでしょう』って、神さまも結構楽しんでいらっしやるのかもしれませんね」

運営資金のほとんどは寄付に頼る現状。経済的自立の足がかりにと工芸品店を開いた。聖クララ観想修道会の好意で、修道院の一部を店として五年間無料で借りることができたからだ。障害をもった若者がつくった陶器や木工品などの工芸品を扱い、店員も全員障害者。「お給料を払うだけの売り上げはなく、今は支出だけ。でもみんな意欲が出てきて技術的にも成長していますから、楽しみなんです」そう言って笑う野原さんの瞳は、キラキラと輝いていた。

## 子どもたちから たくさん のことを教えられています

By Shoko



重度の障害をもった男の子がいます。育てられない親から、自然に死んだほうがいいと見放されていた子どもです。その子は目も見えない、手も、足も動かない、自分では何一つできません。ところが彼が外出すると、毎日出会った誰かを回心させる。その子には人の心を動かす力がある。私の妹と同じ「役立たず」のその子が奇跡を起こすのです。これは私たちの目にはわからない、神さまの業です。

昨年やって来た少女は十五歳。十三歳で家出をし、売春、窃盗を繰り返して、仲間同士のけんかで脊髄を刺され、歩けなくなりました。言動も乱暴でもちろん神さまも信じない。ほかの子どもたちへの影響も心配なので別の施設に移そうと考えていたある日のこと、子どもたちが「サン・マルティンが笑った」と言うのです。私たちの家のサン・マルティンのご像は、ときどき笑ったり泣いたりします。私は信仰浅い人間で、そういう変化は見落としますが、子どもたちは純粹だからちゃんと見分けるんです。その日も子どもたちがご像の前で騒いでいたら、通りかかった彼女が「バカみたい」と。  
ところが翌日、移転を告げるために彼女に会った、見違えるように明るい表情の彼女が「サン・マルティンが私に向かって笑ったのを見た。神さまは本当にいる!」、と言うではありませんか。その日から



子どもを見守る  
サン・マルティン像

彼女は一八〇度変わりました。自分の障害は神さまがこれ以上悪い道を進まないように導いてくれた結果だ。そしてサン・マルティンがよく来たなって笑ってくださったと言って、他者をゆるし、祈り、リハビリにも励むようになったのです。

彼女に「サン・マルティンが笑った」と言われたとき、私は自分を振り返り、情けなくなりました。サン・マルティンが笑って迎えたその子を、私は追い出そうとしていたんですから。

何もできないと言って見棄てるのは簡単です。でも神さまは必ずすべてものに使命を与えられている。ここにいる子どもたちから、私はいつもたくさんのかんことを教えられています。

☆サン・マルティンの家へのご支援は42頁をご覧ください。